

[共同研究]

光学産業における技術形成と生産構造の変容に関する実証研究

共同研究者

代表 山下 雄 司（日本大学経済学部准教授）
沼 田 郷（青森大学総合経営学部教授）

はしがき

本研究プロジェクトは、光学産業の技術・技能がいかに形成されるのか、国内外の様々な事例を元に、集積のあり方や取引関係によってあらたな生産構造が生み出される『過程』を実証することにある。

プロジェクトの構成員は、国際経済論・アジア経済論を専門とする沼田郷（青森大学総合経営学部教授）とイギリス経済史・産業史を専門とする山下雄司（日本大学経済学部准教授）の2名である。研究対象も時代も異なるが、両名ともに日本大学経済学部にてかつて開催されていたカメラ産業研究会のメンバーであり、2015年には矢部洋三編『日本デジタルカメラ産業の生成と発展—グローバル化の展開の中で』日本経済評論社を上梓した。両名ともに、「どのようにしてモノは作られるのか」という産業のあり方に興味や関心を抱いている。

学際と表現すると手垢にまみれた感が否めないが、同じ対象を見ていても研究手法が異なるため刺激的な共同研究であった。山下は歴史畑のため一次・二次史料の渉猟、「文字」を探してしまうが、沼田らが進めてきた関係者への聞き取り調査によって史料解読では得られない情報を見落としてきたことを運まきながらも知ることができた。現地を調査していると、工場の立地や輸送条件、距離感に気がつくことが数多くあった。とくに製糸から光学・精密へと異なる産業分野にシフトした状況や感覚は現地に行かないと得られないと感じた。

沼田・山下両名は、科学研究費「日本と台湾における光学産業の成長と連鎖：基盤研究（C）2014-2016年」の交付後、経済科学研究所のプロジェクトに採択され、従来対象とされなかった分野やミッシングリンクとなっている部分の解明を目標に調査を継続することが可能となった。

沼田は、大戦直後から現代の光学技術・技能の伝播ルートとして北関東・東北地域での集積を実証し、さらにデジタルカメラの開発・製造に関する日本と台湾の企業間関係の事例研究を継続している。今回はデジタルカメラをめぐる「日本-台湾」の関係が成果論文のテーマである。

山下は、大戦中から戦後の混乱期の光学・精密機器生産の実証と標準化・規格の伝播過程の解明を目的に、諏訪・岡谷・塩尻で製造業者に関する史料調査を行った。今号は塩尻を舞台に製糸業の遊休工場を疎開工場として利用した日本光学の活動と、同地を引き継いだ八陽光学によるカメラ生産への新規参入・撤退を対象とする成果論文を作成した。

とはいえ、脱稿後も新たな資料・史料が見つかり、聞き取り対象・機会も増え、新たな知見を得ている。したがって、いずれの論文も完成形ではなく、あくまで現段階でたどり着いた中間成果に過ぎないことをお断りしておきたい。

